

サナトクマーラによる「より偉大なもの」の教説

—*Chāndogya-Upaniṣad-Bhāṣya* VII 和訳研究 (2) ChU.Bh.VII, 1-15—

橋本 一道

はじめに

Chāndogya-Upaniṣad (以下 ChU) 第 VII 章には初期仏教との関連性を考察する上で重要な表現がいくつかみられる。

筆者はすでに、ChU.VII のうち、その後半部（第 16 節から第 26 節まで）と、それに対するシャンカラ (Śaṅkara, 700-750 頃) による註釈 (*Chāndogya-Upaniṣad-Bhāṣya*, 以下 ChU.Bh.) の試訳を行った¹。この ChU.VII. 16-26 は、ChU.VII で最も重要となる「豊富 (bhūman)」の教説を含み、また、初期仏教と関連する「見る (√dṛś)、聞く (√śru)、思う (√man)、認識する (vi-√jñā)」の四語を用いた「見聞覚知」表現などがみられる点で重要であった。本稿は、この教説へとつながる ChU.VII の前半部（第 1 節から第 15 節）の試訳である。この ChU.VII. 1-15 も、見聞覚知表現の一例がみられるという点や、smara の教説（後述）を含む点で注目すべきであろう。

ChU.VII はサナトクマーラ (Sanatkumāra) がナーラダ (Nārada) にアートマンの教説を説く物語である。ナーラダは老齢のバラモンと考えられている²。一方サナトクマーラは、このウパニシャッドでのみ知られる思想家であり、こちらはラダクリシュナンなどによるとクシャトリヤと解されるようである。これにより、この二人の物語はウパニシャッドにおけるクシャトリヤがバラモンに教えを受ける事例の一つと考えられる。その前半部となる ChU.VII. 1-15 は、ナーラダが「より偉大なもの (bhūyas)」を尋ねるのに対してサナトクマーラが答えるという形式で、「名称 (nāman)」を始めとする様々な、より高次な真理を順繰りに説示するという内容である。シャンカラは、この高次・低次の関係を基本的に原因・結果の関係と解し、結果よりも原因の方が偉大であるという立場からこの教説を解釈している。

¹ cf. 拙稿 [2018]

² ナーラダという名前は、ChU.VII の他には *Atharvaveda* や *Āitareya-Bṛāhmaṇa*、*Maitrāyaṇī-Saṃhitā* で名前が見られる (Arthur [1912a, p. 445])。またこのほか、彼ら二人の人物像については Radhakrishnan [1996a, p. 223]、今西 [1979, p. 27]、中村 [1990, pp. 341-342] など参照。

凡例

- ・ 翻訳にあたって、シャンカラ註は [Up.1964] を底本とした。
- ・ 註釈のうち、ChU 本文の引用と見られる箇所には下線を附した。
- ・ 指示代名詞などが示す意味や、訳語の元のサンスクリット語といった意味上の補足は () で、和訳における文章の補足は □ で示した。

ChU., ChU.Bh.VII. 1-15 試訳

ChU.VII. 1. 1

「教えたまえ、尊師よ」と〔言って〕、ナーラダはサナトクマーラに近づいた。〔サナトクマーラは〕彼（ナーラダ）に言った。「あなたが知っていること、それをもって私に教えを請いなさい。それ以上のことを私はあなたに言おう。」

彼（ナーラダ）は〔以下のように〕言った。

ChU.Bh.VII. 1. 1

究極的な真実を教示するという重要なことを専らとする第六章であった。〔第六章は、〕まさに有 (sat) たるアートマンが単一であると確定することを専らとするものとして適している。

〔第六章では〕有について、此岸的な変化を特徴とする諸々の真実が説示されたのではない。というわけで、次に、名称を始めとし生気を終わりとするそれら〔の諸真実〕を順に説示し、またそれによって、豊富と呼ばれる最高の真実を説き示そう。というわけで、月〔を指す〕指を見るようなものである (śākhācandradarśanavat) この第七章を始める。

有の此岸的な諸真実が説示されず、また有のみが説示された場合、〔有以外の〕他のものも認識されていないかもしれないという疑念が誰かにあるかもしれない。それ（疑念）があってはならないのでそれらを説示せんとす。

あるいは、階段をのぼるように、粗大なものから始めて、微細なものとより微細なものである知覚の対象を知らせて、それ以上の自身の王位 (svārājya)³ について私は灌頂しよう。と

³ ChU.VII. 25. 2 に「自ら統治する者 (svārājya)」という語がみられるが、これを指していると考えられる

いうわけで、名称などを説示せんとす。あるいは、名称などから順次に限定された〔より高次の〕諸々の真実、そしてそれらの中でさらに高度な最も優れたものは豊富（bhūman）と呼ばれる真実である。というわけで、それ（豊富という名の真実）を賛嘆するために、名称などを順番に説明する。

しかして（tu）、短篇物語（ChU.VII 本文）は最高の知（paraśavidyā）⁴を賛嘆するためのもので

（cf. 拙稿 [2018, p. 18, f. 37]）。

さて、この故に、まさに「アートマン」による等置がある。まさにアートマンは下にある。…まさにアートマンはこの一切である。実に、このように見て、このように思い、このように認識しているそのような彼は、アートマンを楽しみ、アートマンと戯れ、アートマンと番い、アートマンによって歓喜する。彼は自ら統治する者（svarāḍ）となる。彼には一切の世界において自由な行動（kāmacāro）がある。しかし、これとは異なって知る者たちは、彼らは他の王を有する者たちとなり、消滅する世界を有する者たちとなる。一切の世界において、彼らには自由な行動がない。

この「自ら統治する者（svarāḍ）」は同文内にある「自由な行動（kāmacāra）」という語と関連づけて理解するべきであろう。すなわち、自ら統治する者（svarāḍ）にとっては自由な行動（kāmacāra）があり、他の王を有する者（anyarājan）には自由な行動がない（akāmacāra）とされている。これは、ある範囲内で自由に行動できることを、王が支配域内で自由に行動できることになぞらえているものと考えられる。おそらくこの箇所を受けてであろうか、シャンカラは（yathā）kāmacāra を「自国において王に自由な行動があるように」と解する（ChU.Bh.VII.1.5）。

また、ChU.VII.1-15の各所では「その範囲での自由な行動（yathākāmacāra）」に「念想する（upa-vas）」行為が結び付けられている（本文参照）。「念想する（upa-vas）」は、ウパニシャッド（upaniṣad）の語源とも考えられている言葉であるが、その意味は「至高存在と既知の現象存在との等置」である（cf. 井狩 [1969]）。つまり、例えば VII.1 の場合、ブラフマンと名称を等置すると、世界における名称の範囲においてのみの「自由な行動（yathākāmacāra）」があるというのである。

古代インドにおけるヴェーダ祭祀は、宇宙の理法（ṛta-）を知っていること（veda）に基づいて、世界を動かしている聖なる原理たるブラフマンに働きかけることによって、世界を操作しようとする営みであった（cf. 後藤 [2008, p. 58]、中村 [1990, p. 148]）。そして、ウパニシャッドの時代においては、単に祭祀を行うことよりも、その神秘的意義を知ることが重要視されるようになった。すなわちここでは、名称が一切世界たるブラフマンであると念想することにより、その世界（の一範囲）を支配しようとすることを示しているのではないか。そしてこのことが「自身の王位・統治権」として表されているのだろう。なお、興味深いことに、ChU.VII においては 1-15 節では yathākāmacāra の語が用いられ、最終 26 節（「豊富（bhūman）」の教説）においては yathā が付いていない kāmacāra が用いられる。シャンカラもこの点に注目している（ChU.Bh.VII.25.2）。これは、1-15 節の段階では統治が完全ではなく、yathā が範囲の制限をする役割を担っていると考えられる。そして、「豊富」の境地では、yathā のない完全な kāmacāra を得るという表現によって梵我一如的境地を表しているといえるのではなかろうか。

⁴ [ChU.Dī.p.291]によると、これはアートマンの知である。「アートマンの知を賛嘆するために…短篇物語が始められる（ātmavidyāstutyartham...ākhyāyikārabhyate）」（ChU.Tī.VII.1.1）

なお、Brahmasūtra によると「tu」はそれより前の内容を除去する働きがあるという（BS.I.3.8-9）。これに従うならば、この「tu」によって前文の豊富を賛嘆することを除去して、最終的に賛嘆されるべきな

ある。

【問】 どうしてか。

【答】 ナーラダは為すべきことを為した聖者であり、全ての知識を有していたけれども、アートマンのことを知らないために嘆き悲しんでいた。まして、知に乏しく、善業をなさないこと甚だしく、目的を達成していない他の人は言うまでもない。あるいは（最高の知を賛嘆するためのものであることに対して）、アートマンの知の他には最高でより優れたものの達成手段はないというこのことを明示するために、サナトクマーラとナーラダの短篇物語が始められる。

全ての知識 (vijñāna) を達成する能力を具えているにも関わらず、聖者であるナーラダにはより優れたもの（アートマンの知）はなかったので、最上の家系と知識と振る舞いを達成する能力を具えていることに基づいた慢心を捨てて、凡人の如くサナトクマーラに近づいた、より優れたものの達成手段を獲得するために。これ故に、アートマンの知には最高のものを獲得する達成手段たる性質があると明示されたのである。

「教えたまえ、教えなさい、尊師よ、尊師よ」と〔言って〕、実に、近づいた。教えたまえ、尊師よ、というのは本文である。サナトクマーラに、最高の修行者であり (yogīśvaraṃ) 最も学識がある者に (brahmiṣṭha) ⁵、ナーラダは、近づいた。作法通りに近づいた彼 (ナーラダ) に [サナトクマーラが] 言った。「何であろうと、アートマンに関してあなたが知っていること、それをもって、その説明をもって、私に教えを請いなさい、「私はこのことを知っている」というように。あなたに、あなたのために、私はそれ、あなたの知識より、以上のことを言おう」と [サナトクマーラが] 言ったので、彼は、ナーラダは、〔以下のように〕 言った。

ChU.VII. 1. 2⁶

のはアートマンの知であることを示していると考えられる。

⁵ brahmiṣṭha の語は、*Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad* (以下 BĀU) .III において、ヴィデーハ国 (Videha) のジャンカ王 (Janaka) が行った祭祀に集まったバラモンの中で、ヴェーダの知識に最も通曉している者 (anūcānatama) に対して用いられる。そして、神学論争 (brahmodya) に勝利するような者 (ここではヤージュニャヴァルキヤ) が brahmiṣṭha にあたる。BĀU.III においてバラモンに対して用いられるこの語をサナトクマーラにあてている点から、シャンカラはサナトクマーラをバラモンとみていた可能性がある。

⁶ この節には、当時のバラモンが学ぶべきとされていたのであろう種々の学問が列挙されている。各々の内容については Horsch [1966, pp. 9-42] や Olivelle [1998, pp. 563-564] などにて検討されているが、それでもこれらの意味は明確ではない。本稿ではシャンカラの註釈も踏まえて解釈しているが、Olivelle 氏が述べる通り、これにそのまま従うと時代錯誤となる書名もある。したがって、特に具体的な書名と思し

【ナ】尊師よ、私は、リグ・ヴェーダ (ṛgvedaṃ)、ヤジュル・ヴェーダ (yajurvedaṃ)、サーマ・ヴェーダ (sāmavedaṃ)、第四のアタルヴァ〔・ヴェーダ〕 (ātharvaṇaṃ caturtham)、第五の伝説や古譚 (itiḥāsapurāṇaṃ pañcamaṃ)、諸ヴェーダについてのヴェーダ（知識） (vedānāṃ vedaṃ)、祖霊祭 (pitryaṃ)、算術 (rāṣiṃ)、占卜術 (daivaṃ)⁷、宝探し術 (nidhiṃ)⁸、討

きものはそれに示される内容についての教え一般を示していると解釈する。

なお、BĀU.IV.1.2, IV.5.11(≡II.4.10)にも類似する列挙がなされるが、当該箇所とは一致しない。四ヴェーダまでは両者とも共通しているが、BĀUではその後、四ヴェーダ以外の文学的カテゴリーと考えられる列挙 (itiḥāsaḥ purāṇaṃ vidyā upanīśadaḥ ślokaḥ sūtrāṇy anuvyākhyānāni vyākhyānāni) が続き、食べ物や飲み物なども並列される。これらは言語による認識対象 (IV.1.2) や「大いなる存在の吐息 (mahato bhūtasya niḥśvasitam)」 (IV.5.11(≡II.4.10)) として述べられており、ChUにおいて「学ぶべき学問」とされているものとは性格が異なるようである。

また、クマールラ (650-700 頃) が伝統的な権威のある学問を示すものとしてこの箇所を引用しつつ、これに名を連ねない仏教は異端であるというアナクロニズムの下、仏教を批判している (cf. 吉水 [2015, pp. 38-40])。

⁷ 先行訳やシャンカラの註記に従って占卜術と読むが、BĀU、ChUにおいて daiva という語は、基本的に「人間的な (mānuṣa)」という語に対して「神的な」を意味するものとして用いられる (cf. BĀU.I.4.17, VI.2.6, ChU.V.1.4)。ただし学問として列挙されるときに同じ意味を持つかどうかは不明である。

⁸ 先行訳において、nidhi という語は「年代論」や「宝探し」に解釈が別れる。この語は ChU.VIII.3.2 にもみられ、ここでは地面に埋まった黄金を示す意味で用いられている。

しかるに、彼の〔一族の〕中で、生きている人々、そして死んだ人々、また彼が望んでいるが得ていない他のもの、その全てを、彼はここから去ってから見出す。何故なら、ここにおいて彼の諸々の真実なる欲望の対象は、虚偽によって覆い隠されているからである。

従って、例えば、場所を知らない人々が、埋蔵された黄金という財宝 (hiranyanidhiṃ nihitam) の上を何度も歩き回っても、彼らは〔それを〕見出さないように、まさにこのように、これらすべての生き物は、日々〔そこへ〕行きつつもこのブラフマンの世界を見出さない。何故なら、〔すべての生き物は〕虚偽によって邪魔されているからである。

シャンカラは「黄金という財宝」を、人によって埋められた人為的な財宝と解釈している。ChU.Bh.VII.1.2 同様、ここでも註記に nidhiśāstra の語が用いられているため、少なくともシャンカラは両者にみられる nidhi を同類のものと捉えていたのであろう。

ChU.Bh.VIII.3.2

従って、その場合、例えば、黄金という財宝を、まさに黄金を、再び取るために埋蔵する人々によって埋蔵されたのが財宝である。そのような埋蔵された黄金という財宝を、地面の下に埋められたものを、場所を知らない人々が、諸々の発掘に関する教書によって財宝の場所を知ることのない彼らは、財宝の上を何度も歩き回っても、財宝を見出さないように、〔それを〕知ることもできない。シャンカラの解釈のように人為的な財宝を表すかどうかは不明であるが、この用例より、nidhi は地面に埋まった財宝を探索する術を表すものと解釈できる。ただし、それが伝統的なパラモンの学問としてふさわしいかどうかについて疑問が残る。

論術 (vākovākyaṃ)、処世術 (ekāyanaṃ)⁹、神の知識 (devavidyāṃ)、ブラフマン¹⁰の知識 (brahnavidyāṃ)、精霊の知識 (bhūṭavidyāṃ)¹¹、兵法の知識 (kṣatrayidyāṃ)、天体の知識 (nakṣatrayidyāṃ)、蛇と天人の知識 (śarpadevajanavidyāṃ) を学んだ。尊師よ、これを私は学んだ。

ChU.Bh.VII. 1. 2

尊師よ、私はリグ・ヴェーダを学んだ (adhyemi)、記憶した (smarāmi)。「あなたが知っていることを」¹²云々と、知識 (vijñāna) を問われたからである。

そのように、ヤジュル・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、第四のアタルヴァ・ヴェーダを、〔アタルヴァは〕ヴェーダの言葉が主題であるから、第五のヴェーダである伝説や古譚を、マハーバータを第五とする (bhāratapañcamānām)、諸ヴェーダについてのヴェーダ (知識) を、文法学を (vyākaraṇam)、という意味である。実に、文法学によって、名詞などに区別してリグ・ヴェーダなどが知られるからである。

祖霊祭を、祖先に対する供養における規則を (śrāddhakalpam)。算術を、数学を (gaṇitam)。占卜術を、前兆に関する知識を (utpātajñānam)。宝探し術を、マハーカーラなどの宝探しに関する教えを (mahākālādinidhiśāstram)。討論術を、論理に関する教えを (tarkaśāstram)。処世術を、処世に関する教えを (nītiśāstram)。神の知識を、語源学を (niruktam)。リグ・ヤジュル・サーマと呼ばれるブラフマンについての知識である (brahmaṇa rgyajurśāmākhyaśya vidyāṃ) ブラフマンの知識を。〔それは、〕音韻学、祭式学、韻律学の集合である (śikṣākalpacchandaścitayāḥ)。精霊の知識を、精霊に関する書を (bhūṭatantram)。兵法の知識を、弓術を (dhanurvedam)。天体の

⁹ ekāyana の語は、例えば BĀU.IV. 5. 12 (= II. 4. 11) や ChU.VII. 5. 2 などにみられるように、複数のものがあるところで一つになることを意味するものとして用いられる。シャンカラによる解釈を加味するならば、これを政治的に人々を一つにまとめることを意味すると解釈できようか。Olivelle [1998, p. 563] は直前の vākovākyaṃ との対比から、これを monologues と解釈している。

¹⁰ ここの brahman は、シャンカラの註釈に従うならば「実現力のある神聖な言葉としての brahman」を意味すると考えられる。(cf. 後藤 [2008, p. 62, pp. 65-66])

ただし、brahnavidyā という語が BĀU.I. 4. 9 (BĀU-M.I. 4. 20) においてみられるのであるが、BĀU.I. 4. 9 (BĀU-M.I. 4. 20)

それから人々が言う。「ブラフマンの知識によって (brahnavidyā) 〔人間が〕一切になると人々が考えるもの、それが一切になったということから、ブラフマンは何を知ったのか。」

こちらでは世界の最初たる中世原理としてのブラフマンの知識を意味していると考えられる。

¹¹ Margaret [1977, p. 47] によると、「demonology. One of the eight branches of medicine dealing with maladies caused by demoniac possession.」。ただし ChU では、悪霊や鬼霊の意味で用いられる bhūta は管見の限りみられない。

¹² ChU.VII. 1. 1

知識を、天文学を（*jyautiṣam*）。蛇と天人の知識を、蛇の知識を、解毒術を（*gāruḍaṃ*）¹³。天人の知識を、調香、歌と舞、音楽、装飾品などの知識（*gandhayuktiṇṭyagītavādyāśilpādivijñānāni*）を。
尊師よ、これを、全てを、私は学んだ。

ChU.VII. 1.3

【ナ】尊師よ、このような私は聖句を知っているのみで、アートマンを知らない。実に、尊師のような人々から私が聞いたことは「アートマンを知る者は憂苦を渡り越える（*tarati śokam ātmavid*）」ということである。尊師よ、この私は嘆き苦しんでいる。尊師はこの私を憂苦の彼岸へと渡り越えさせよ。

〔サナトクマールは〕彼（ナラダ）に言った。

【サ】何であろうと、あなたが教わったことは、それは名称にすぎない。

ChU.Bh.VII. 1.3

尊師よ、このような私は、全てを知っているけれども、聖句を知っているのみである。言葉の意味だけの知識を有しているのみであるという意味である。実に、全ての言葉は〔意味を〕表示するものにすぎない。そして、全ての表示するものは諸々の聖句に含まれている。

聖句を知っているのみであるとは、聖句を知る者、つまり祭式行為を知る者という意味である。何となれば、「諸々の祭式行為は諸聖句において〔合一する〕」¹⁴と後に述べるであろう。アートマンを知らない、私はアートマンを知らない。

【対論者】アートマンも、必ず諸聖句によって明らかにされるのに、どうして聖句を知る者はアートマンを知る者ではないのか。

【立論者】そうではない。表示するものと表示されるもの（*abhidhānābhidheya*）の区別は変化するもの（*vikāra*）であるから。アートマンが変化するものであるとは認められない。

【対】アートマンもまた、アートマンという言葉によって表示されるではないか。

【立】そうではない。〔なぜなら〕「そこから言葉は引き返す（*yato vāco nivartante*）」¹⁵「そこに

¹³ *gāruḍa*=a Mantra against poison. (Monier Williams Dictionary)

Sarpāvidyā=*Viṣavidyā*=Toxicology or science(vidyā) of poisons(*viṣa*). (Margaret [1977, pp. 271, 336])を踏まえて「解毒術」と解釈した。

¹⁴ ChU.VII. 4. 1

¹⁵ *Taittirīya-Upaniṣad*. II. 4

意と共に〔ブラフマンに〕到達することなく、それから言語は引き返す（*yato vāco nivartante*）。
ブラフマンの歓喜を知る者はいつ何時も恐れぬ。

おいて他のものを見ず (yatra nānyat paśyati)」¹⁶云々と天啓聖典にあるからである。

【対】その場合に、アートマン以前に、どのようにして「彼はアートマンである」などという言葉がアートマンを理解させるのか。

【立】これは過失ではない。身体を有する個別的なアートマンという区別の対象に対して用いられている〔アートマンという〕言葉は、身体などがアートマンであることを否定されているところに残されている何らかのものを、言葉で表現できないものであっても理解させる。

例えば、王に率いられる兵士が見られるとき¹⁷、王が傘や幡や旗などに遮られた場合、王は見られていなくても「この王が見える」という言葉の使用がある。その場合、「何がその王であるのか」と王の特定を検討するとき、〔現に〕見られている一方のもの（傘や幡や旗）が〔王であるということが〕否定されているから、他方のものについて、王が〔直接〕見られてなくても王だという確信が生ずるであろう。その如くである。

それ故に、このような私は聖句を知っている、祭式行為を知っているのみである。そして、全ての祭式行為と結果は変化するものであるのも、私は変化するものを知るのみである。アートマンを知らない。アートマンの本来の自体（変化するものとなる前のさま）を知らないという意味である。

これ故に「先生を有する人は知っている (ācāryavān puruṣo veda)」¹⁸云々と言われた。そして

実に、これは、その身体を具えているアートマンであり、これは前のもの（生氣から成るアートマン）に属する。実に、認識から成るアートマンは、そのようなこの意から成るアートマンと異なり、その内部にある。それ（認識から成るアートマン）によってこれ（意から成るアートマン）は満たされる。...

¹⁶ ChU.VII. 24. 1

そこにおいて他のものを見ず (yatra nānyat paśyati)、他のものを聞かず、他のものを認識しない、それは豊富である。一方、そこにおいて他のものを見て、他のものを聞き、他のものを認識する、それは僅少である。実に、豊富であるもの、それは不死のものである。しかれば、僅少なもの、それは死すべきものである。...

¹⁷ [Up. 1964, p. 542] には yathā sarājīkāyāṃ dṛśyamānāyāṃ senāyāṃ...とあるが、[ChU.1934, p. 393] には dṛśyamānāyāṃ がない。

¹⁸ ChU.VI. 14.2 (ウッダーラカ・アールニがシュヴェータケートゥに有 (sat) がどのようなものなのかを説く。以下は、例え話として「人は目隠しされていると、あちこち彷徨ってしまつてガンダーラ地方 (有の例え) には到達できない」という文脈に続くものである。)

誰かが彼の目隠しを解いて、「この方角にガンダーラ地方がある。この方角へ行きなさい」と言うでしょう。〔すると、〕彼は学識があり、聡明なので、村から村へ尋ねながら、まさにガンダーラ地方へ到達するだろう。まさにこのように、ここで先生を有する人は知っている (ācāryavān puruṣo veda)。「私が解放されない限り、その限りにおいてのみ、この〔私に〕遅延がある。それから私は〔有 (sat)

「諸々の言葉がそこから引き返す」¹⁹云々と諸々の天啓聖典にある。

私が、私が、尊師のような人々から、あなたと似ている人々から、聞いたことは、会得した知識は、実に、以下のことであるから、すなわちアートマンを知る者は、憂苦を、心の苦悩を、つまり目的が果たされていないという自覚を持っていることを渡り越える、凌駕する、であるから、この私はアートマンの知を有していないから、おお、尊師よ、私は嘆き苦しんでいる、目的が果たされていないという自覚によって、常に苦悶させられている。この私を、私を、憂苦の、憂苦の大海の、彼方に、果てに、尊師は、アートマンの知という舟によって目的が果たされたという自覚に、渡り越えさせよ、赴かせよ、無畏に行かせよ、という意味である。

そのように言っている彼（ナラダ）に〔サナトクマーラは〕言った。「何であろうと、あなたが教わった、あなたが学んだことは、学問によって、その目的である知識は比喩的に表現されるので、あなたが知っていること、それは名称のみである。」「変化するものとは言葉による把握であり、名称である（vācārambhaṇam vikāro nāmadheyam）」²⁰と天啓聖典にある。

ChU.VII. 1.4

【サ】「リグ・ヴェーダ、ヤジュル・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、第四のアタルヴァ〔・ヴェーダ〕、第五の伝説や古譚、諸ヴェーダについてのヴェーダ（知識）、祖霊祭、算術、占術、宝探し術、討論術、処世術、神の知識、ブラフマンの知識、精霊の知識、兵法の知識、天体の知識、蛇と天人の知識とは、実に名称のみである。これは名称のみである。名称を念想せよ。」

ChU.Bh.VII. 1.4

リグ・ヴェーダ、ヤジュル・ヴェーダなどは実に名称であり、これは名称のみである。ブ

へ〕入るだろう」と。

¹⁹ *Taittirīya-Upaniṣad* II. 4, 註 15 参照。

²⁰ ChU.VI. 4. 1(cf. VI. 2-4) (有 (sat) に関する教説。有より熱、熱より水、水より食物というように創出された三つの色形のみが真実であり、火などは名称にすぎないという文脈。この後、火に代わって太陽、月、雷光について同様に説かれる。)

火の赤い色、それは熱の色であり、〔火の〕白い〔色〕、それは水〔の色〕であり、〔火の〕黒い〔色〕、それは食物〔の色〕である。

火から火という性質は去った。変化するものとは言葉による把握であり、名称である (vācārambhaṇam vikāro nāmadheyam)。三つの色というものこそ真実である。

ラフマンの觀念によって名称をブラフマンであると念想せよ。ヴィシュヌという觀念によって、像を〔ヴィシュヌであると〕念想するかの如くに。

ChU.VII. 1. 5

名称がブラフマンであると念想する (upāste) その者は、名称が及ぶ限り、そこにおいてその者にはその範囲での自由な行動 (yathākāmacāra) があるだろう。名称がブラフマンであると念想するその者は。

【ナ】尊師よ、名称より偉大なもの (bhūyas) はありますか。

【サ】実に、名称より偉大なものがある。

【ナ】尊師はそれを私に話したまえ。

ChU.Bh.VII. 1. 5

名称がブラフマンであると念想するその者は、その人にとっての果報を聞きなさい、名称が及ぶ限り、名称の領域に、そこにおいて、その名称の範囲において、その者にはその範囲での自由な行動があるだろう、自国において王に自由な行動があるように。

名称はブラフマンであると念想するその者は、という総括である。

尊師よ、名称より偉大なもの、より優れたもの、はありますか。ブラフマンを見ること (知覚すること) に相当する〔名称以外の〕他の何か、という意味である。サナトクマーラは言った。「実に、名称より優れたものが必ずある」と。そのように言われた彼 (ナーラダ) は言った。「もしあるならば、尊師はそれを私に話したまえ」と。

ChU における、七章の最初の節²¹

ChU.VII. 2. 1

実に、言語 (vāc) ²²は名称より偉大である。言語はリグ・ヴェーダを知らせる。ヤジュル・

²¹ 以下、同様の文言が各章ごとにあるが、本稿では省略する。

²² シャンカラはこの vāc を「機能」と解釈している。vāc は、ChU においては基本的により包括的な意味での「言語」を表すが、その一方で、このように機能・能力としての意味を持つ vāc の用例が ChU.V.1 などみられる。そこでは vāc は視覚や聴覚などと同列に扱われる (また cf. ChU.VIII. 12. 4-5 など)。

ChU.V. 1. 8

言語は出て行った。一年間、旅に出た後で、それは帰ってきて言った。「私なくして、どのようにしてあなたたちは生きることができたのか。」「(各生体諸機能は言った。)」〔言語能力によって〕語るこ

ヴェーダを、サーマ・ヴェーダを、第四のアタルヴァ〔・ヴェーダ〕を、第五の伝説と古譚を、諸ヴェーダについてのヴェーダ（知識）を、祖霊祭を、算術を、占術を、宝探し術を、討論術を、処世術を、神の知識を、ブラフマンの知識を、精霊の知識を、兵法の知識を、天体の知識を、蛇と天人の知識を、天を、大地を、風を、虚空を、水を、光を、神々を、人間たちを、諸々の家畜を、諸々の鳥を、草と樹木を、諸々の獣を、昆虫と蝶と蟻に至るまでを、正義と不正を (dharmaṃ cādharmaṃ)、真実と虚偽を (satyaṃ cāṇṛtaṃ)、善と不善を (sādhu cāsādhu)、心地良いものと不快なものを (hṛdayajñāṃ cāhṛdayajñāṃ)〔知らせる〕。

もし、言語がなかったならば、正義と不正とは知らしめられないだろう。真実と虚偽、善と不善、心地良いものと不快なものとは〔知らしめられないだろう〕。実に、言語だけがこの一切を知らせる。あなたは言語を念想せよ。

ChU.Bh.VII. 2. 1

実に、言語は、言語とは機能 (indriyaṃ, 言語能力) である。舌根などの八つの発声器官におかれて、諸々の音を明示するものである。そして、諸々の音（音素）が名称であり、言語は名称より偉大であると言われる。実に世間において、原因は結果より偉大であると見られるからである。例えば、父親が息子より〔偉大である〕ように、そのように。

何故、言語は名称より偉大であるのか。答えて言った。言語は、リグ・ヴェーダを知らせる。「これは、リグ・ヴェーダである」というように。そのようにヤジュル・ヴェーダなどを同様に〔知らせる〕。心地良いものを、好ましいものを。その反対である不快なものを〔知らせる〕。けれども、もし言語がなかったならば、正義などは知らしめられないだろう。言語が存在しないとき、学問は存在しない。学問が存在しないとき、その意味を聞くことは存在しない。それを聞くことが存在しないとき、正義などは知らしめられないだろう。知らされることはないだろうという意味である。

それ故に、実に言語は、音を発音することによってこの一切を知らしめる。これ故に、言語は名称より偉大である。それ故に、あなたは言語をブラフマンであると念想せよ。

ChU.VII. 2. 2

【サ】言語をブラフマンであると念想するその者は、言語が及ぶ限り、そこにおいてこの者

となく、〔しかし〕生氣によって呼吸しながら、視覚によって見ながら、聴覚によって聞きながら、意によって静慮しながら、口の利けない人のように、このように〔私たちは生きることができた〕。言語能力は〔身体に〕入った。

にはその範囲での自由な行動があるだろう。言語がブラフマンであると念想するその者は。

【ナ】尊師よ、言語より偉大なものはありますか。

【サ】実に、言語より偉大なものがある。

【ナ】尊師はそれを私に話したまえ。

ChU.VII.3.1

実に、意 (manas)²³ は言語より偉大である。拳が二つのアーマラカ〔の実〕、あるいは二つのコーラ〔の実〕、あるいは二つのアクシャ〔の実〕を包みこむように、意は言語と名称を包みこむ。人が意によって「私は聖句を学びたい」と意欲する (manasyati) とき、そのとき人は〔聖句を〕学ぶ。「私は諸々の祭式行為を行いたい」〔と意欲するとき、〕そのとき人は〔祭式行為を〕行う。「私は息子や家畜を求めたい」〔と意欲するとき、〕そのとき人は〔息子や家畜を〕求める。「私はこの世界とかの世界を求めたい」〔と意欲するとき、〕そのとき人は〔この世界とかの世界を〕求める。実に、意はアートマンであるからである。実に、意は世界であるからである。実に、意はブラフマンであるからである。あなたは意を念想せよ。

ChU.Bh.VII.3.1

意は、意欲すること (manasyana) によって限定された内的器官 (antahkaraṇaṃ) であり、言語より偉大である。それは意欲する働きを有し、言語を言語の対象に対して働かしめるからである。そのため、言語は意に含まれる。そして、何か (X) が何か (Y) に含まれる場合、Y は X を覆っているから、X より偉大である。

世間において拳が二つのアーマラカ〔の実〕を、果実を、あるいは二つのコーラ〔の実〕を、棗の実を、あるいは二つのアクシャ〔の実〕を、ビピータカ (毗離勒) の実を、包みこむ。拳が二つの果実を覆う。つまり、拳の中にそれら二つが含まれたのである。そのように、言語と名称を、アーマラカ〔の実〕などのように、意は包みこむ。人が、人間が、あるときに、意によって、内的器官によって意欲する。意欲することとは言葉を発しようとする観念 (発話意図) である。どのようにかという、「私は聖句を学びたい、唱えたい」と、このよ

²³ ChU において manas は、sam-√kṛp や √dhyaī などの思考に関わる「思考器官」(cf. ChU.I. 2. 6, II. 22. 2, BĀU.II. 4. 11=IV. 5. 12) や、能力としての意味を持つであろう「思考」そのもの (cf. ChU.VI. 15. 1-2) を表す。今西 [1979, pp. 10-11] は、この √manasya によって限定される manas を「意欲」を意味するものと解釈している。

うに発話意図を起こしてから、そのとき人は〔聖句を〕学ぶ。

同様に、諸々の祭式行為を行いたいとき、行動しようとする観念（行動意図）を起こしてから、そのとき人は〔祭式行為を〕行う。息子と家畜を求めたいとき、獲得願望を起こしてから、それを獲得するための手段を実行することによって、そのとき人は〔息子や家畜を〕求める。息子などを獲得するという意味である。同様に、この世界とかの世界とを手段によって求めたいとき、それを獲得するための手段を実行することによって、そのとき人は〔この世界とかの世界を〕求める、獲得する。

実に、意はアートマンである。意があるとき、アートマンには動作者性と享受者性があり、それ（意があるとき）以外では〔そのようなことは〕ありえない、というように、意はアートマンであると言われる。実に、意は世界である。実に、意が存在するときのみ世界（この世界とかの世界）があり、それを獲得するために手段を実行することもある、というように、実に、意は世界であるから、それ故に、実に、意はブラフマンであるから、そのようであるから、あなたは意を念想せよ。

ChU.VII. 3. 2

【サ】意はブラフマンであると念想するその者は、意が及ぶ限り、そこにおいてこの者にはその範囲での自由な行動があるだろう。意がブラフマンであると念想するその者は。

【ナ】尊師よ、意より偉大なものはありますか。

【サ】実に、意より偉大なものがある。

【ナ】尊師はそれを私に話したまえ。

ChU.VII. 4. 1

実に、意図（saṃkalpa）²⁴は意より偉大である。人は意図する（saṃkalpayate）とき、そのとき意欲する。そのとき、言語を促し（īrayati）、また、名称に対してそれ（言語）を促す。諸聖句は名称において合一し、諸々の祭式行為は諸聖句において〔合一する〕。

²⁴ 他にも種々の用例はみられるが（cf. BĀU.I. 3. 6, 5. 3, II. 4. 11⇐IV. 5. 12, VI. 1. 5, ChU.I. 2. 6, VIII. 1. 5, 2. 1-10, etc. ）、saṃkalpaの意味は難解である。（cf. 今西 [1979, pp. 11-12], Olivelle [1998, p. 565]）

また、saṃkalpaについて、シャンカラが「意図とは、白や青などを区別することによって、目の前にある対象を分別することである（saṃkalpaḥ pratyupasthitaviśayavikalpanaḥ śuklanlādibhedena）」（BĀU.Bh.I. 5. 3, [Up. 1964, p. 698]）という解釈を施している箇所もある。

ChU.Bh.VII.4.1

実に、意図は意より偉大である。意図は、意欲することを有する内的器官（=意）の機能（*vr̥tiḥ*）であり、為すべきことと為さざるべきことの対象を区別して判断すること（*kartavyākartavyaviśayavibhāgena samarthanam*）である。実に、区別によって判断された対象があるときに、何かを為さんとする観念が、意欲することの直後に生ずるからである。

【問】どのようにか。

【答】人が意図する、為すべきことなどの諸々の対象を、「これは為すべきである」と区別するとき、そのとき、人は意欲する。諸聖句を学びたい云々というように。

そのとき、直後に、聖句などを発音することに対して言語を促す。そして、また、それを（言語を）名称に対して、名称を発する原因である発話意図を起こしてから促す。名称において、普遍的な名称において、諸聖句は、特殊な音声は、合一する、〔諸聖句が名称に〕含まれるという意味である。実に、普遍的なものに特殊なものは含まれるからである。

諸聖句において、諸祭式行為は合一する。諸聖句によって明示された諸祭式行為が為される。聖句に基づかない祭式行為はない。聖句の明示によって実在性を得ることになる正しき祭式行為であるものは、ブラーフマナによって、これ（祭式行為）はこの果報のために為されるべきであると規定される。諸々のブラーフマナにおいて、諸祭式行為の言及が見られることも、それもまた、諸聖句の中で得られた実在性を有する祭式行為のみを明らかにするものである。実に、聖句によって明示されないいかなる祭式行為も、ブラーフマナにおいて言及されることは見られない。

世間において、祭式行為は三つのものによって規定されているということは一般に認められている。三つのものという言葉は、リグ・ヤジュル・サーマのことである。そしてアタルヴァ〔・ヴェーダ〕の場合は、諸聖句における諸祭式行為は詩人たちが見たものである。それ故に、諸聖句において、諸祭式行為は合一するということは適切である。

ChU.VII.4.2

実に、そのようなこれら（意など）は、意図において合一し（*tāni ha vā etāni saṃkalpaikāyanāni*）²⁵、意図を本質とし、意図を抛り所とする。天と地とは意図した。風と虚空とは意図した。水と光熱とは意図した。雨はそれら（天、地、風、虚空、水、光熱）の意図のために意図する。

²⁵ BĀU.IV.5.12(=II.4.11)には「そのように、意は一切の意図が合一するところである。（*evam sarveṣāṃ saṃkalpānāṃ mana ekāyanam*）」とあり、ChU のこの箇所と比べると関係が逆になっている。cf. 今西[1979, p. 11]

雨の意図のために食物が意図する。食物の意図のために諸生氣は意図する。諸生氣の意図のために諸聖句は意図する。諸聖句の意図のために諸祭式行為は意図する。諸祭式行為の意図のために世界は意図する。世界の意図のために一切は意図する。そのようなこれが意図である。あなたは意図を念想せよ。

ChU.Bh.VII.4.2

実に、そのようなこれらは、意などは、意図において合一し、意図における単一 (eko)、すなわち〔意図へ〕行くこと (ayanam)、〔意図へ〕行きつくこと (gamanam)、つまり〔意図へ〕帰滅 (pralayo) を有するもの、それらが意図において合一するものである。意図を本質とし、生起において (utpattau)、意図を拠り所とする、持続において (sthitau)。天と地とは意図した。実に、〔天と地が〕意図を為したごとくである。天と地とが天と地がであり、天と地が不動であると特徴づけられる。同様に、風と虚空とは意図した。それら二つもまた、意図を為したごとくである。同様に、水と光熱は意図した。自身の本体として、不動であると特徴づけられる。

なんととなれば、それらの、天と地などの、意図のために、〔天と地などの〕意図を原因とする雨は意図する、能力があるものとなる。同様に、雨の意図のために、〔雨の〕意図を原因とする食物は意図する。実に、雨から食物が生じるからである。食物の意図のために諸生氣は意図する。諸生氣は食物から形成された、つまり食物が支えているからである。「食物は綱である (annaṃ dāma)」²⁶云々と天啓聖典にあるからである。それら（諸生氣）の意図のために諸聖句は意図する。生氣を持つ者が諸聖句を学ぶのであって、力なき者が〔学ぶの〕ではない。実に、諸聖句の意図のために諸祭式行為は、諸聖句によって明示された、〔諸聖句に従って〕執行されている供火祭などは意図する、果報をもたらす能力があるものとなる。

そういうわけで〔諸祭式行為の意図のために〕、果報たる世界は (lokaḥ) 意図する。〔世界が〕〔祭式〕行為と行為主体を内属させるものとして、能力があるものとなるという意味であ

²⁶ Som [2001, p. 622] によると BĀU.II.2.1 の引用である。しかし、BĀU.II.2.1 もまた難解であり、シャンカラがこれを引用する意図も判然としない (cf. Olivelle [1998, p. 500])。以下に本文と、参考として岩本 [2013, p. 199] の訳を示す。

yo ha vai śīsurṇ sādhanam sapratyādhānam sasthūnam sadānam veda sapta ha dviṣato bhrātrvyān avaruṇaddhi |
ayanam vāva śīsur yo 'yam madhyamaḥ prāṇaḥ | tasyedam evādhānam idaṃ pratyādhānam prāṇaḥ sthūṇānam
dāma ||

この犠牲の幼獣を、その住処、その小屋、その繋がれる杭および縄と共に知る者は、憎悪の心をもつ七人の敵を駆逐する。まこと、この幼獣とはこの中央の氣息であり、これ（身体をさす）はその住処であり、これ（頭をさす）はその小屋であり、氣息はそれを繋ぐ柱、食物はその縄である。

る。世界の意図のために一切は、世界 (jagat) は、意図する、完全な自体のために〔能力があるものとなる〕。実に、そのような、最終的な果報であるこの一切の世界 (jagat) は、それは全て意図を根本とする。故に、〔これら一切より〕優れたそのようなこれが意図である。故に、意図を念想せよ、と言って、それ (意図) を念想する者の果報を述べた。

ChU.VII. 4. 3

意図をブラフマンであると念想するその者は、彼は構想された諸々の世界に、確固たる〔彼〕は確固たる〔世界〕に、拠り所のある〔彼〕は拠り所のある〔世界〕に、不安のない〔彼〕は不安のない〔世界〕に到達する。意図が及ぶ限り、そこにおいてこの者にはその範囲での自由な行動がある。意図をブラフマンであると念想する者は。

【ナ】尊師よ、意図より偉大なものはありますか。

【サ】実に、意図より偉大なものがある。

【ナ】尊師はそれを私に話したまえ。

ChU.Bh.VII. 4. 3

意図をブラフマンであると、ブラフマンの観念によって念想する者は、構想された〔世界〕に、創造者によって、この人にはこれらの世界は果報であるというように構想された、判断された、すなわち意図した〔世界〕に、彼は、知者は〔到達する〕。そして確固たる〔彼〕は確固たる〔世界〕に、確固としていないことに限りがないのに比べて、常住な〔世界〕に〔到達する〕。世間の人が確固としていないとき、世界について、確固たるものという構想は無意味である。というわけで、確固たる者であるとき、拠り所のある〔世界〕に、資産を備えた〔世界〕に〔到達する〕、という意味である。そして、家畜や息子などによって、拠り所を得ていると自身で見ることにより、拠り所のある〔彼〕は、自分自身の資産を備えた〔彼〕は、不安のない〔世界〕に、敵などの驚怖を欠いた〔世界〕に、そして不安のない〔彼〕は自ら到達する、獲得する、という意味である。意図が及ぶ限り、意図の領域である、そこにおいてこの者にはその範囲での自由な行動がある、自身の意図の〔領域〕であって、〔他の〕一切〔の人〕の意図の〔領域〕ではない。より高い果報と矛盾するからである。意図をブラフマンであると念想する者は云々は以前と同様である。

ChU.VII. 5. 1

実に、心 (citta) は意図より偉大である。実に人が思慮する (cetaṇā) ととき、そのときその

人は意図する。そのときその人は意欲する。そのときその人は言語を促す。また、名称に対してそれ（言語）を促す。名称において、諸聖句は合一する。諸聖句において、諸祭式行為は〔合一する〕。

ChU.Bh.VII. 5. 1

実に、心は意図より偉大である。心とは、思慮する主体たること（cetaṣṭvā）であり、しかるべき時に応じた観念を持つこと（prāptakālānūrūpabodhavattvam）であり、過去や未来の対象の有用性を検討する能力（atītanāgataviśayaprayojananirūpaṣāmarthyam）である。そしてまた、それは意図より偉大である。

【問】 どうしてか。

【答】 得られた事物を「このようなこれが得られた」と思慮するとき、そのときに、それを受け取るために、あるいは捨てるために、そのときその人は意図する。そのとき意欲する云々は前と同様である。

ChU.VII. 5. 2

実に、そのようなこれら（意図など）は心において合一し、心の本質とし、心を拠り所とする。それ故に、たとえ多くを知っていても、心がない者であるならば、まさに「この人は存在しない」と人々は彼に言う。「彼が何を知っていても、あるいはこの人が知者であるならば、この如くに心がない者ではないだろう」〔と彼らは言う〕。しかし、もし知識が少ない人が心を有しているならば、実に人々は彼〔の言うこと〕を聞こうとする。心は実にこれらのもの（名称や言語などの）の合一するところである。心はアートマンである。心は拠り所である。心を念想せよ。

ChU.Bh.VII. 5. 2

これらは、意図を始めとし行為と結果（karmaphala）を終わりとする諸々のものは、心において合一し、心の本質とし、心から生起し、心を拠り所とする、心において持続する、というのも前²⁷と同様である。さらにまた、心には威厳がある。心は意図などの根本であるから、それ故に、たとえ多くを知っている者、多くの聖典を熟知している者でも、心がない者であるならば、しかるべき〔時に応じた〕云々²⁸という思慮する者としての能力を欠いているならば、そういう能力がある世間の人々は、まさに「この人は存在しない、存在していても、

²⁷ ChU.VII. 4. 2

²⁸ ChU.Bh.VII. 5. 1

存在しないに等しい」と人々は彼に言う。そして、彼が何を、何らかの聖典などを知っていても、聞いたとしても、それもまた彼にとっては虚しいだけであると語る。

【問】 どうしてか。

【答】 もし、この人が知者であるならば、この如くに、このように、心がない者ではないだろう。それ故に、この人にとっては、聞いたことであっても、全く聞いていないと人々は言うという意味である。しかし、もし知識が少ない人であっても、心を有しているならば、彼〔の言うこと〕を、彼が言った意味を把握するために、人々は聞こうとする、聞くことを求める。そしてそれ故に、心は実にこれらのものの、意図などの、合一するところである云々というのは前と同様である。

ChU.VII. 5. 3

心がブラフマンであると念想する者は。彼は思慮された諸々の世界に、確固たる〔彼〕は確固たる〔世界〕に、拠り所のある〔彼〕は拠り所のある〔世界〕に、不安のない〔彼〕は不安のない〔世界〕に到達する。心が及ぶ限り、そこにおいてこの者にはその範囲での自由な行動がある。心がブラフマンであると念想するその者は。

【ナ】 尊師よ、心より偉大なものはありますか。

【サ】 実に心より偉大なものがある。

【ナ】 尊師はそれを私に話したまえ。

ChU.Bh.VII. 5. 3

思慮された〔諸々の世界〕に、〔思慮が〕積み重ねられた〔世界〕に、賢者の性質によって、彼は、心を念想する者は、確固たる〔世界〕に云々は〔前に〕述べられた意味を有する。

ChU.VII. 6. 1-2

実に、静慮 (dhyāna) は心より偉大である。大地は静慮する (dhyāyati) かの如くである。空は静慮するかの如くである。天は静慮するかの如くである。水は静慮するかの如くである。山々は静慮するかの如くである。神と人間たちは静慮するかの如くである。それ故にこの世で人々の偉大さを (mahattāp) 得る人々は、彼らは実に静慮によって得られるものの一部を有する者ようになる。一方では低劣な者たちが、争いを好み、卑劣で、他人を誹謗して、他方では有力な人々が静慮によって得られるものの一部を有する者ようになる。静慮を念想せよ。

静慮がブラフマンであると念想するその者は、静慮が及ぶ限り、そこにおいてこの者にはその範囲での自由な行動がある。静慮がブラフマンであると念想するその者は。

【ナ】 尊師よ、静慮より偉大なものはありますか。

【サ】 実に、静慮より偉大なものがある。

【ナ】 尊師は、それを私に話したまえ。

ChU.Bh.VII. 6. 1-2

実に、静慮は心より偉大である。静慮とは、聖典で述べられた神格などという諸対象に対して不動であり、異なる種類の〔観念〕によって妨害されない観念の連続 (śāstrokta devatādy-ālambaneṣv acalo bhinnajātiyair anantaritāḥ pratyayasamptānah) である。人が一意専心なること (ekāgratā) と言うようなものである。そして、静慮の威厳が結果として見られる。

【問】 どういうことか。

【答】 例えば、修行者 (yogī) が静慮の果報を得るときに静慮しつつ不動となるように、そのように大地は静慮するかの如くである、不動であると見られる。空は静慮するかの如くである云々は他のものと同様である。神と人々ということでは神と人々は、あるいは人々は神と等しいということでは神に等しい人々は、寂靜などの性質を備えた人々は、神としての自体を捨てないという意味である。そのように、より優れたものが静慮であるから、それ故にこの世で、この世界で、人々の、実に、諸々の財産によって、あるいは知識によって、あるいは諸々の性質によって、偉大さを、偉大性を、得る、財産などという偉大性の原因を得る、という意味である。

静慮によって得られるものの一部を有する者のようになる、静慮の賜物である得られるものとは、静慮の果報として得るものである、それ（一部）はその（得られるものの）一部、つまり構成要素であり、何らかの小部分である。静慮の果報として得るものの小部分を有する人々のようになる、という意味である。彼らは〔静慮によって得られるものの一部を有する者〕のようになる、彼らは不動であるように特徴づけられ、下劣な人々であるように〔特徴づけられるの〕ではない。一方で、しかし、僅少な者たちが、下劣な者たち、何であつても財産などの偉大性の一部分も得ていない者たちは、彼らは前述〔の内容〕に反する者たちであり、争いを好み、争いを習慣とし、卑劣で、他人の過失によって輝き、他人を誹謗して、そして、隣人に関係した他人の過失のみを話すことを習慣とする者たちである彼らは誹謗する者たちとなる。他方では、財産などを原因とする偉大性を得た者たち、彼らは他の者たちに対して優れているので、有力である者たちが、知識を持つ先生や最も優れた王など、

静慮によって得られるものの一部を有する者たちのように〔なる〕云々というのが述べられた意味である。故に、静慮の偉大性 (mahattvam) が結果として見られる。故に心より偉大である (bhūyas)。故にそれを念想せよ云々というのが述べられた意味である。

ChU.VII. 7. 1

実に、認識 (vijñāna) は静慮より偉大である。人は認識によってリグ・ヴェーダを認識する。ヤジュル・ヴェーダを、サーマ・ヴェーダを、第四のアタルヴァ〔・ヴェーダ〕を、第五の伝説と古譚を、諸ヴェーダについてのヴェーダ (知識) を、祖霊祭を、算術を、占術を、宝探し術を、討論術を、処世術を、神の知識を、ブラフマンの知識を、精霊の知識を、兵法の知識を、天体の知識を、蛇と天人の知識を、天を、大地を、風を、虚空を、水を、光を、神々を、人間たちを、諸々の家畜を、諸々の鳥を、草と樹木を、諸々の獣を、昆虫と蝶と蟻に至るまでを、正義と不正を、真実と虚偽を、善と不善を、心地良いものと不快なものを、食物と飲み物を、この世界とかの世界を、認識によってのみ認識する。認識を念想せよ。

ChU.Bh.VII. 7. 1

実に、認識は静慮より偉大である。認識は、聖典の意味を対象とする知識 (śāstrārthaviṣayam jñānam) である。それ (認識) は静慮の原因であるから、静慮より偉大なものである。どうしてそれがより偉大であるかという、認識によってリグ・ヴェーダを認識する。「これがリグ・ヴェーダである」というように、認識根拠たるものによって対象の知識を有するようなものが静慮の原因 (認識) である。ヤジュル・ヴェーダなども同様である。さらにまた家畜などを、そして聖典で実証された正義と不正を、善と不善を、世間的に実証されたものを、あるいは記憶聖典に基づいたものを、そして、全ての不可視の対象を認識によってのみ認識する、という意味である。それ故に、認識が静慮より偉大であることは適切である。故に認識を念想せよ。

ChU.VII. 7. 2

認識がブラフマンであると念想するその者は、実に、彼は諸々の認識を有する世界に、諸々の知識を有する〔世界〕に到達する。認識が及ぶ限り、そこにおいてこの者にはその範囲での自由な行動がある。認識がブラフマンであると念想するその者は。

【ナ】尊師よ、認識よりも偉大なものはありますか。

【サ】実に、認識よりも偉大なものがある。

【ナ】尊師はそれを私に話したまえ。

ChU.Bh.VII. 7. 2

念想の果報を聞きなさい。認識を有する者は、認識があるような世界において、そのような認識を有する世界に、そして知識を有する〔世界〕に到達する、獲得する。認識 (vijñānam) は聖典の意味を対象とし、知識 (jñānam) はその他を対象とする知性である。それ（認識や知識）を有する諸々のものと関連づけられた諸世界を得る、という意味である。認識が及ぶ限り云々は前と同様である。

ChU.VII. 8. 1-2

実に、力 (bala) は認識より偉大である。実に、力を有する一人は、認識を有する者たち百人をも震えさせる。人が力を有する者となると、その時人は立ち上がる者 (utthātā) となる。立ち上がる者は〔師匠に〕奉仕する者 (paricaritā)²⁹となる。〔師匠に〕奉仕する者は師事する者 (upasattā) となる。師事する者は見る者 (draṣṭā) となる。聞く者 (śrotā) となる。思う者

²⁹ 先行訳では pari-√car の意味は「仕える」と「動き回る」に解釈が分かれる。ChU の他の用例は以下の如くであるため、これに従って当該文脈での pari-√car を「奉仕する」と解釈する。

ChU.IV. 4. 2

彼女（母ジャーバーラー）は、彼（サティヤカーマ・ジャーバーラ）に言った。

【母】愛しい子よ、私は、あなたがどんな姓なのかということを知らない。私は若い頃に〔男たちと〕多く性的な関係を持つ下女 (paricāriṇī) であった時にあなたを得た。
そのような私はあなたがどんな姓なのかということを知らない。しかし、私はジャーバーラーという名前である。あなたはサティヤカーマという名前である。それ故、あなたはサティヤカーマ・ジャーバーラと言いなさい。

ChU.VIII. 8. 4

〔神々 (deva) の代表インドラと鬼神たち (asura) の代表ヴィローチャナが、水盤に映った自分の姿を見てアートマンだと誤解し、そのままブラジャーパティのもとを去ってしまう。すると、〕

二人（インドラとヴィローチャナ）を見送ってから、ブラジャーパティは言った。

【ブ】彼ら二人は、アートマンを把握することなく、〔アートマンを〕見い出すことなく去る。神々であれ、あるいは鬼神たちであれ、これ（水盤の中に見える自分自身）をウパニシャッド（同置）として有するであろう二人のうちどちらか、彼らは破滅するだろう。

心が完全に平静となったかのヴィローチャナは、鬼神たちの所へ向かった。彼は、彼らにこのウパニシャッドを告げた。

【ヴ】この世において、喜ばせるべきは自分自身である。尊重されるべき (paricarya) は自分自身である。この世において、人がまさに自分自身を喜ばせ、尊重している (paricarat) ときに、この世界とかの世界の両方を得る。

(mantā) となる。知る者 (bodhā) となる。行ずる者 (kartā) となる。認識する者 (vijñātā) となる。

実に、力によって大地は存続する。力によって空は存続する。力によって天は、力によって山々は、力によって神と人間たちは、力によって諸々の家畜は、諸々の鳥は、草と樹木は、諸々の獣は、昆虫と蝶と蟻に到るまでは〔力によって存続する〕。力によって世界は存在する。力を念想せよ。

力がブラフマンであると念想するその者は、力の及ぶ限りそこにおいてこの者にはその範囲での自由な行動がある。力がブラフマンであると念想するその者は。

【ナ】 尊師よ、力より偉大なものはありますか。

【サ】 実に、力より偉大なものがある。

【ナ】 尊師はそれを私に話したまえ。

ChU.Bh.VII. 8. 1-2

実に、力は認識より偉大である。力とは、食物の摂取によって生まれたもの (annopayoga-janitam) で、意の認識の対象について思い浮かばせる能力 (manaso vijñeye pratibhānasāmarthyam) である。実に、食物を有していないから「尊敬すべき者よ、リグ〔・ヴェーダ〕などは私〔の心〕に全く思い浮かばない (ṛgādīni na vai mā pratibhānti bho iti)」³⁰と天啓聖典にある。また、身体においてはそれ(力)は立ち上がるなどの能力である。何故ならば、力を有する一人の生物 (prāṇī) が認識を有する百人をも震えさせる。例えば、狂った象が集まった百人の人間たちをも〔震えさせる〕ように。このように力は食物などの摂取を原因としているから、それ故に人が、人間が (puruṣaḥ)、力を有する者、力を所有する者となると、その時人は立ち上がる者、立ち上がることの動作者となり、そして立ち上がる者は先生たちと師匠に〔師匠に〕奉仕する者、〔師匠に〕奉仕すること、すなわち〔彼らの教えを〕聞こうとすることの動作者となる。そして求め歩く者は師事する者、彼らと行動を共にし、同居して、寵愛を受ける者となる、という意味である。

³⁰ ChU.VI. 7. 2

彼(シュヴェータケートゥ)は十五日間食べなかった。それから彼は彼(父ウッダーラカ・アールニ)の近くに座った。

【シ】 尊敬すべき者よ、私は何を語ろうか。

【ウ】 愛すべき者よ、リグの詩句、ヤジュスの祭詞、サーマンの詠唱を〔語れ〕。

【シ】 尊敬すべき者よ、それらは私〔の心〕に全く思い浮かばない (na vai mā pratibhānti bho iti)。

そして、師事する者は、〔先生の〕近くで、〔共に〕行動する者は、一意専心して、先生や他の教師たる師匠を見る者となる。それから、彼らが言ったことを聞く者となる。それから、彼らによって言われたことを〔言われた〕通りに理解するので、〔その〕理解から思う者となる、思っている者である。そして知る者となる、「これはまさにこの如くである」というように。それから、そのように決心して、彼らに言われたそのことについて行ずる者、実践する者となる。認識する者、実践の結果を経験する者となる、という意味である。さらにまた、力には威厳があり、実に力によって大地は存続する云々というのが、直接の意味である。

ChU.VII. 9. 1

実に、食物 (anna) は力より偉大である。それ故に、たとえ十日間の夜の間食べなくて、しかし生きていたとしても、そのとき、彼は見ることも、聞くことも、思うことも、知ることも、行ずることも、認識することもできない者となる。しかし、食物を入手したとき³¹、見ること、聞くこと、思うこと、知ること、行ずること、認識することができる者となる。食物を念想せよ。

ChU.Bh.VII. 9. 1

実に、食物は力より偉大である。力の原因たる性質があるからである。何故に食物には力の原因である性質があると言われるのか。力の原因は食物であるから、それ故に、たとえ誰でも、十日間の夜の間食べなくて、人は食物の摂取を原因とする力の損失によって死ぬ。もし死ぬことがなくても、しかし生きていたとしても、実に、一ヶ月間食べていない者たちでも生存していることが見られるからである。そのとき、彼は生きているけれども見ることができない者である、師匠についても〔見ることができない〕。実に、それ故に聞けない者である云々というように、全て前 (ChU.VII.8) と反対になる。

しかし、たとえ何日も食べていなくて、見ることなどの行為ができないでいる者でも、食物を入手している者は、入手とは取得することであり、食物の獲得という意味である。それ（食物の獲得）を有するようなその人が、食物を入手している者である。入手 (āyah) というこれは、音の変化 (vaṃavyatyaya) による〔不正規形〕であり、athānnasyāyai という読みの場合でも、全く同様の意味である。見ることができる者云々という結果を聞くからである。実

³¹ [ChU.1934] [Up.1964] では athānnasyāyai とある。文法的には誤りであるが、シャンカラの註釈によれば原文としては athānnasyāyai が正しいようである。

に、食物を摂取したとき、見ることなどの能力が見られるから、それ（食物）が獲得されないときはそうではない。故に、食物を念想せよ。

ChU.VII. 9. 2

食物がブラフマンであると念想する者は、実に、彼は食物と飲み物を有する諸々の世界に到達する。食物の及ぶ限り、そこにおいてこの者にはその範囲での自由な行動がある。食物がブラフマンであると念想するその者は。

【ナ】尊師よ、食物より偉大なものはありますか。

【サ】実に、食物より偉大なものがある。

【ナ】尊師はそれを私に話したまえ。

ChU.Bh.VII. 9. 2

そして、〔念想の〕果報として、実に、彼は食物を有する、たくさんの食物を有する、そして飲み物を有する、たくさんの水を有する、食物と飲み物は常に結びついているから、諸々の世界に到達する。〔他は〕前と同様である。

ChU.VII. 10. 1

実に、水（ap）は食物より偉大である。それ故に、豊かな雨が降らないとき「食物が少なくなるだろう」と〔考えて〕、諸生氣が健康を損なう。しかし、豊かな雨が降るとき「食物が多くなるだろう」と〔考えて〕、諸生氣が歡喜する。実に、この大地はこの凝固した水であり、空、天、山々、神と人間たち、諸々の家畜、諸々の鳥、草と樹木、諸々の獣、昆虫と蝶と蟻に至るまでは、これらは凝固した水に他ならない。水を念想せよ。

ChU.Bh.VII. 10. 1

実に、水は食物より偉大である。食物の原因たる性質があるから。そのようであるから、それ故に、ある時期において、豊かな雨が、穀物にとって有益で、吉兆の印である雨が降らないとき、そのとき諸生氣は健康を損なう、苦しむ。どうしてかという、今年は食物が私たちに少なくて、より僅少に、なるだろうと答える。しかし、さらにまた、豊かな雨が降るとき、そのとき、諸生氣が、諸々の生物が、歡喜する、幸福に、喜んだ状態になる。食物が多く、実り豊かになるだろうと〔考えて〕。凝固した食物には、水を起源とする性質があるから、これらは凝固した水に他ならない。個々の凝固した形相として変化したものである

ので、この大地は、まさに凝固した〔水であり〕、空などは、凝固した水に他ならないから、水を念想せよ。

ChU.VII. 10. 2

水がブラフマンであると念想するその者は、一切の欲望の対象を得て、満足する。水が及ぶ限り、そこにおいてこの者にはその範囲での自由な行動がある。水がブラフマンであると念想するその者は。

【ナ】尊師よ、水よりも偉大なものはありますか。

【サ】実に、水よりも偉大なものがある。

【ナ】尊師はそれを私に話たまえ。

ChU.Bh.VII. 10. 2

〔念想の〕果報として、水がブラフマンであると念想する者は、一切の欲望の対象を得る。欲望の対象となる形あるものを〔得る〕、という意味である。そして、満足には水を起源とする性質があるから、水を念想することによって満足する。他は〔前と〕同様である。

ChU.VII. 11. 1

実に、光熱（tejas）は水より偉大である。従って、実にそれ（光熱）は風を抑制して虚空を満遍なく熱する。そのとき人々は「燃えるように熱い。焼け付くように熱い。雨が降るだろう」と言う。光熱こそ最初に現れて、それから水を生みだす。〔また、〕そのような（熱としての）それ（光熱）が〔あると〕、垂直方向と水平方向への雷光を伴って雷鳴が轟く。それ故に人々は「〔雷光が〕閃く。〔雷鳴が〕鳴る。雨が降るだろう」と言う。光熱こそ最初に現れて、それから水を生みだす。光熱を念想せよ。

ChU.Bh.VII. 11. 1

実に、光熱は水より偉大である。光熱には水の原因たる性質があるからである。どうして水の原因たる性質があると言うのか。光熱は水の起源であるから、それ故に、従って、実にそれは、光熱は、風を抑制して、妨げて、自分自身によって風を不動にして、虚空を満遍なく熱する。虚空に行き渡って熱するときに、そのとき人々は、世間の人々は、「燃えるように熱い、一般的に生類は〔光熱で〕苦悶する。焼け付くように熱い、〔光熱は〕身体を〔苦しめる〕。故に、雨が降るだろう」と言う。実に、世間において認められたから、原因が整ったこ

とを見た人には、結果があるだろうという認識がある。光熱こそ最初に、自身を表して、現れて、それから、直後に、水を生みだす。故に光熱は水を生みだす者であるから水より偉大である。

さらにまた、そのようなそれ（光熱）は、まさに光熱は稲妻という形で雨の原因となる。どのようにか。垂直方向と、垂直方向に行く、水平方向への、水平に進む、雷光を伴って、一緒に、雷鳴が、雷のゴロゴロ鳴る音が、轟く。それ故に、それを見ることにより、世間の人々は、「[雷光が] 閃く。[雷鳴が] 鳴る。雨が降るだろう」と言う云々が言われた意味である。故に、光熱を念想せよ。

ChU.VII. 11. 2

光熱がブラフマンであると念想するその者は、光熱を有する者である。彼は光熱を有し、輝きを有し、闇が打ち払われた諸世界に到達する。光熱の及ぶ限り、そこにおいてこの者にはその範囲での自由な行動がある。光熱がブラフマンであると念想するその者は。

【ナ】尊師よ、光熱より偉大なものはありますか。

【サ】実に、光熱より偉大なものがある。

【ナ】尊師はそれを私に話たまえ。

ChU.Bh.VII. 11. 2

そのような光熱の念想の果報として、〔彼は〕光熱を有する者となる。そして、実に、光熱を有し、輝きを有し、光明を有し、闇が打ち払われた、外的及び内的な無知などという闇が取り除かれた、諸世界に到達する。他は直接の意味である。

ChU.VII. 12. 1

実に、虚空 (ākāśa) は光熱より偉大である。実に、虚空の中に太陽と月の両者、雷光、星々、火がある。人は虚空によって呼びかける。人は虚空によって聞く。人は虚空によって答える。人は虚空の中で満足する。人は虚空の中で満足しない。人は虚空の中で生まれる。人は虚空に向かって生まれる。虚空を念想せよ。

ChU.Bh.VII. 12. 1

実に、虚空は光熱より偉大である。虚空には風と結びつけられた光熱の原因となる性質が

あるからである。「風を抑制して」³²というように、風は光熱とともに述べられるので、ここでは光熱とは別に述べられることはない。実に、世間において原因は結果より偉大であると見られる。壺などより粘土〔が偉大である〕ように、そのように虚空は風と結びつけられた光熱の原因である。それ故に偉大である。

【問】 どうしてか。

【答】 実に、虚空の中に太陽と月の両者、〔これらは〕光熱という現象を有する、また、雷光、星々、火がある、光熱という現象を有するものは、虚空における内部のものである。そして、何かの内部にあるようなもの、それは僅少である (alpam)。もう一方は〔それ〕より偉大である (bhūyas)。さらにまた、人は虚空によって呼びかける、誰か (X) が誰か (Y) に〔呼びかける〕。そして呼びかけられた Y は虚空によって聞く。そして X がかけた言葉に Y が答える。人は虚空の中で満足する、互いに全員が楽しむ。そして同様に人は虚空の中で満足しない、妻などが不在であるとき〔満足しない〕³³。人は虚空の中で生まれる、実体的なものによって妨げられているときには〔生まれ〕ない。そのように、虚空に向かって、目指して、芽などが生まれる。その逆はない。故に、虚空を念想せよ。

ChU.VII. 12. 2

虚空をブラフマンであると念想するその者は、実に、彼は虚空を有し、光明を有し、邪魔もののない、広い空間を有する世界に到達する。虚空の及ぶ限り、そこにおいてこの者にはその範囲での自由な行動がある。虚空をブラフマンであると念想するその者は。

【ナ】 尊師よ、虚空より偉大なものはありますか。

【サ】 実に、虚空より偉大なものがある。

【ナ】 尊師はそれを私に話したまえ。

ChU.Bh.VII. 12. 2

〔念想の〕果報を聞きなさい。実に、彼は、知者は、虚空を有し、広さを備えた、光明を有する世界に〔到達する〕。光明と虚空には常住な結合があるからである。そして、光明を有

³² ChU.VII. 11. 1

³³ 虚空と妻の関係について、BĀU. I. 4. 3 では以下のように説かれる。

実に、それは全く満足しなかった。それ故に、人は単独でいるならば満足しない。それは第二のものを欲した。それは抱擁している夫婦と同じくらいの大きさであった〔ので〕、それはこの身体を二つに分割した。それから、夫と妻とが生じた。それ故に、ヤージュニャヴァルキヤは「我々二人はこの片割れのごとくである」と確かに言っていた。それ故に、この虚空はまさに妻によって満たされる。
〔夫は〕彼女（妻）と性交した。それによって人間が生まれた。

し、邪魔もののない世界に〔到達する〕。邪魔もの (saṃbhādhah) は邪魔するもの (saṃbādhanaṃ) である。邪魔ものは互いの苦痛である。それがない、邪魔ものがない、広い空間を有する、広い行動〔範囲〕を有し、広く歩き回ることができる世界に、到達する。虚空の及ぶ限り云々は〔前で〕言われた。

ChU.VII. 13. 1-2

実に、記憶 (smara) ³⁴は虚空より偉大である。それ故に、多くの人が座しているときでも、想起していない (na smaranto) なら彼らはいかなるものも聞かず、思わず、認識しないだろう。実に、彼らが想起するとき、そのとき彼らは聞き、思い、認識するだろう。実に、記憶によって彼は息子たちを認識し、記憶によって諸々の家畜を〔認識する〕。記憶を念想せよ。

記憶をブラフマンであると念想するその者は、記憶の及ぶ限り、そこにおいてこの者にはその範囲での自由な行動がある。記憶をブラフマンであると念想するその者は。

【ナ】尊師よ、記憶よりも偉大なものはありますか。

【サ】実に、記憶より偉大なものがある。

【ナ】尊師はそれを私に話したまえ。

ChU.Bh.VII. 13. 1-2

実に、記憶は虚空より偉大である。記憶とは想起すること (smaraṇaṃ) であり、内的器官の特質 (antahkaraṇadharmaḥ) である。それ (記憶) は虚空より偉大であると、〔bhūyas の〕 (文

³⁴ smara は、ChU.VIII では以下のように「想起」の意味で用いられている。また、ChU.Bh.VII. 1. 2 では「学ぶ (adhyemi)」の註釈として「記憶する (smarāmi)」を意味している。

ChU.VIII. 12. 3 (この他 BĀU.V. 15. 1 参照)

まさにこのように、この (心の) 静穏なるものは、この身体から起き上がって最高の光明に達してから、自らの形態によって現れる。それが最高の人間 (アートマン、cf. ChU.VIII. 3. 4) である。諸々の女や車や親戚と共に、笑いながら、楽しみながら、満足しながら、附属物たるこの身体を想起することのないまま (na smarān)、それはそこを動き回る。車を引く動物が荷車に繋がれているように、まさにそのように、この生氣はこの身体に繋がれている。

ただし、この ChU.VII. 13 では、今西 [1979, pp. 17-18] や Olivelle [1998, p. 565] が解釈するように、これを「意識の集中」とも解釈できる。またこの場合、Olivelle [同] が指摘するように、この smara の意味がパーリ仏典における sati に近づいていることは興味深く、注目すべきであろう。また、このように特別な意味を持つであろう smṛti は ChU.VII. 26. 2 にもみられる。これについては今後の研究課題としたい。

法上の) 性を変化させることによって見られるべきである。想起することがあるとき、想起する人にとっては、虚空などの一切は意味のあるものである。想起することを伴うものが享受されるからである。しかし、想起することがないとき、実在であってもまさに実在していない。実在性の結果が生じないからである。また、憶念 (smṛti) が存在しないとき、実在性は虚空などに到達することができないので、それ故に、想起することは虚空より偉大である。世間において、想起することは偉大であると見られるから、それ故に、集まった、多くの人が、一カ所に、座っている、近くに坐する、ときでも、そこで座っている彼らは、互いに話したことをも、想起していないとすれば、彼らはいかなる、言葉を、聞かず、同様に、思わないであろう、思われるべきことを。想起しているとすれば、そのとき思うだろう。〔しかし〕憶念が存在していないので思わないだろう。同様に、彼らは認識しないだろう。

実に、彼らが想起するとき、思われるべきことと、認識されるべきことと、聞かれるべきことを、そのとき彼らは聞き、思い、認識するだろう。そのように、実に、記憶によって、「彼らは私の息子たちである」と、息子たちを認識し、記憶によって諸々の家畜を〔「これは私の家畜である」というように認識する〕。故に、偉大性があるから、記憶を念想せよ。他は述べられた意味を有する。

ChU.VII. 14. 1

実に、期待 (āśa) は記憶より偉大である。実に、期待によって火をつけられた記憶 (āśeddho vai smaro) は、諸々の聖句を学び、諸々の祭式行為を行い、息子と家畜を求め、この世とあの世を求める。期待を念想せよ。

ChU.Bh.VII. 14. 1

実に、期待は記憶より偉大である。期待とは、得ていないものに対する欲求 (āprāptavastv-ākāṅkṣā) であり、期待、渴愛 (tṛṣṇā)、欲望 (kāma) という複数の同義語によって人々がこれを話す。そしてそれ (期待) は記憶より偉大である。

【問】どうしてか。

【答】実に、内的器官に存在する期待によって、人は想起されるべきことを想起するからである。期待の対象たる性質を有するものを想起しているもの、それが記憶である。故に、期待によって火をつけられる、期待によって増大したものが記憶となる。想起している者がリグ〔・ヴェーダ〕などの、諸々の聖句を学ぶ。そして学んでから、バラモンたちからその意味と諸々の儀則を聞いて、諸々の祭式行為を行う。実に、その果報に対する期待によって、

息子と家畜を、祭式行為の果報として生じたものを、求める、願う。期待によってのみ、その諸々の達成手段を実践する。そして、この世界を、期待によって火をつけられた想起している者のみが、世界を把捉する原因によって、求める。そして、あの世界を、期待によって火をつけられた想起している者が、その達成手段を実践することによって、求める。故に、各々の生物においては、世界は、期待という紐でつながれ、記憶と虚空に始まり名称を終わりととして、環状（数珠状）になっている（cakrībhūtaṃ）³⁵。故に、期待は記憶よりも偉大であるので、それ故に期待を念想せよ。

ChU.VII. 14. 2

期待をブラフマンであると念想するその者は、期待によって彼の一切の欲望が成就する。実に、彼の懇願は虚しくならない。期待が及ぶ限り、そこにおいてこの者にはその範囲での自由な行動がある。期待をブラフマンであると念想するその者は。

【ナ】尊師よ、期待より偉大なものはありますか。

【サ】実に、期待より偉大なものがある。

【ナ】尊師はそれを私に話したまえ。

ChU.Bh.VII. 14. 2

さて、期待をブラフマンであると念想する者、その者にとっての果報を聞きなさい。常に念想されていた期待によって彼の、念想する者の、一切の欲望が成就する、成就に到る。実に、彼の懇願は、全ての熱望は、虚しくならない、熱望された一切のもの、それが必ず生じるという意味である。期待が及ぶ限り云々は前と同様である。

ChU.VII. 15. 1

実に、生氣（prāṇa）は期待より偉大である。あたかも、〔車輪の〕輻（スポーク）が〔車の〕

³⁵ 「環状になった（cakrībhūta）」は、この他、輪廻を表す場面でも用いられる。

BĀU.Bh.VI. 2. 16

それから、煙などによって、繰り返し、次はソーマの世界（月）へ、再びこの世界へというように、このように彼らは、祭式を行う者は流転する。水車のように、環状になった（cakrībhūta）彼らは当てなく彷徨う、という意味である。

ブラフマンを知らない限り、北方の道や即時の解脱を欲している人は輪廻し続ける、と言われる。従って、シャンカラは期待によって繋がれた記憶から名称までの事項が循環構造を為すと解釈していると考えられる。

轂（ハブ）に固定されているように、そのようにこの生氣に一切は固定されている。生氣は生氣によって動く。生氣は生氣を与える。〔生氣は〕生氣に与える。実に生氣は父である。生氣は母である。生氣は兄弟である。生氣は姉妹である。生氣は先生である。生氣はバラモンである。

ChU.Bh.VII. 15. 1

名称に始まり期待に終わるものが、結果と原因たるものとして、また原因と原因に基づくものとして、順次に、より偉大であるものとして確定された、憶念を原因とする実在は、つまり期待という紐や縄によって〔数珠状に〕連結された一切は、全面的に、蓮の繊維（藕糸）のように諸々の紐によって生氣に固定されている。そして〔一切は〕、全面的に遍満し内外に及んだこのようなものによって、糸でつながれた多数の宝珠のように、糸によって結ばれ、維持されているのであるが、そのようなこの生氣は期待より偉大である。

どうしてそれ（生氣）は偉大であるのかということに対して、実例によって、その偉大性を立証しつつ言った。あたかも、世間において、車輪の輻（スポーク）が、車の、轂（ハブ）に固定されているように、取り付けられた、つまり交わったということである、そのように、この、個別的なものの集合体である生氣に、智慧としてのアートマンであり、身体を有する、主要なものであり、そこにおいて最高の神格が、名称と形態へ分化するために、鏡などにおける像のように、生命としてのアートマンとして入り込んだ〔ところである生氣に、一切は固定されている〕。そして、偉大な王に属する総司令官のようなもの（生氣）は支配者に属する（īśvarasya）。『誰が出て行くときに、私は出て行くのだろうか。あるいは、誰がとどまるときに、私はとどまのだろうか。彼は生氣を流出した（kasminn aham utkrānta utkrānto bhaviṣyāmi kasmin vā pratiṣṭhite pratiṣṭhāsyāmīti sa prāṇam asṛjāta）』³⁶と天啓聖典にある。しかし、それは影の如くに支配者に付き従う。

「例えば、車輪の縁（リム）が輻（スポーク）に固定され、輻（スポーク）が轂（ハブ）に固定されているように、まさにそのように、この外的存在の要素は諸々の智慧の要素に固定さ

³⁶ *Praśna-Upaniṣad*. VI. 3-4

彼は考量を為した。『誰が出て行くときに、私は出て行くのだろうか。あるいは、誰がとどまるときに、私はとどまのだろうか（kasminn aham utkrānta utkrānto bhaviṣyāmi kasmin vā pratiṣṭhite pratiṣṭhāsyāmīti sa prāṇam asṛjāta）。』

彼は生氣を流出した。生氣から信念、虚空、風、光、水、大地、感覚器官、意、食物を、食物から力、熱、諸聖句、祭式行為、諸世界を、諸世界において名称を〔流出した〕。

れていて、諸々の智慧の要素は生氣に固定されている。そのようなこの生氣こそが智慧としてのアートマンである (tad yathā rathasyāreṣu nemir arpito nābhāv arā arpitā evam evaitā bhūtamātrāḥ prajñā-mātrāsv arpitāḥ prajñāmātrāḥ prāṇe 'rpitāḥ | sa eṣa prāṇa eva prajñātmā)」³⁷とカウシータキ〔・ウパニシャッド〕にある。故に、このようにこの生氣に、一切は、言われたようなものは、固定されている。故に、そのようなこの生氣は、他に依存しないものは、生氣によって、自身の力によってのみ、動く、行くことなどの行為において、この（生氣の）能力は他が為したものではない、という意味である。一切の行為と行為主体と結果の区別の類のものは生氣のみにあるのであり、生氣の外にはない、というのがこの文脈の意味である。生氣は生氣を与える、〔生氣が〕与えたもの、それはまさに自分自身である。何かに与える。それもまた生氣にである。故に父などと呼ばれるものもまた生氣に他ならない。

ChU.VII. 15.2

もし人が父に、あるいは母に、あるいは兄弟に、あるいは姉妹に、あるいは先生に、あるいはバラモンに、躊躇なく何か口答えのようなものをしたならば、人々は「おい、お前は恥を知れ」とその人に言った。「実に、あなたは父殺しである。実に、あなたは母殺しである。実に、あなたは兄弟殺しである。実に、あなたは姉妹殺しである。実に、あなたは先生殺しである。実に、あなたはバラモン殺しである」と。

ChU.Bh.VII. 15.2

どうして父などの言葉には、一般に認められる意味を捨てて生氣の対象となる性質があるというのか。こう言われる。生氣が存在するとき、父などにおいて、父などの言葉の使用があるからである。そしてそれ（生氣）が出て行くとき、使用はないからである。

³⁷ Kauṣītaki-Upaniṣad.III. 8

...実に、そのようなこれら十の外的存在の要素は、智慧に関連して〔存在して〕いて、十の智慧の要素は外的存在に関連して〔存在して〕いる。実に、何となれば、外的存在の要素が存在しないならば、智慧の要素は存在しないだろう。あるいは智慧の要素が存在しないならば、外的存在の要素は存在しないだろうからである。何故なら、両者のうちの片方によってでは、どのような形態も成立し得ないからである。しかるに、このようなそれは個別的に〔存在しているの〕ではない。例えば、車輪の縁（リム）が輻（スポーク）に固定され、輻（スポーク）が轂（ハブ）に固定されているように、まさにそのように、この外的存在の要素は諸々の智慧の要素に固定されていて、諸々の智慧の要素は生氣に固定されている。そのようなこの生氣こそが智慧としてのアートマンであり (tad yathā rathasyāreṣu nemir arpito nābhāv arā arpitā evam evaitā bhūtamātrāḥ prajñāmātrāsv arpitāḥ prajñāmātrāḥ prāṇe 'rpitāḥ | sa eṣa prāṇa eva prajñātmā)、歡喜であり、不老であり、不死である。...

【問】 どうしてそう言ったのか。

【答】 人が、誰かが、父などのうちの一人に、もし、彼に、躊躇なく、その人にとって相応しくないようなことを、何か、お前呼ばわりなどに関した言葉を、口答えをした、そのとき、彼に、近くにいる分別ある人たちが、言った。「おい、お前は恥を知れ。おい、お前は恥を知れ」というようにである。「実に、あなたは父殺しである。」父の殺害者である云々というように。

ChU.VII. 15. 3

しかし、もし生氣が出て行った彼らを、火かき棒を使って、一遍に焼き尽くしても、実に、人々は彼を父殺し、母殺し、兄弟殺し、姉妹殺し、先生殺し、バラモン殺しとは言わないだろう。

ChU.Bh.VII. 15. 3

しかし、実に、生氣が出て行った彼らを、身体の支配者が離れた者を、火かき棒を使って、一遍に、まとめて、焼き尽くしても、分割して (vyatyasya) ³⁸焼いてしまっても、一遍にか部分的にかなどのやり方によって焼くという特徴を有するとても残酷な、まさに彼らの身体に関する行為を為している彼を、人々は父殺しなどと言わないだろう。それ故に、父などと呼ばれるものは生氣に他ならないということが、肯定的随伴と否定的随伴 (anvaya-vyatirekābhyām) によって理解される。

ChU.VII. 15. 4

何故ならば、生氣こそそれら一切であるからである。実に、そのような彼、つまりこのように見る者、このように思う者、このように認識する者は雄弁な者 (atīvādi) となる。もし人々が彼に「あなたは雄弁であるか」と言うならば、「私は雄弁である」と言うべきである。それを否定するべきではない。

ChU.Bh.VII. 15. 4

それ故に、何故ならば、生氣こそそれら、父など、一切、動くものと動かないもの、であるからである。そのような彼は、生氣を知る者は、このように、言われたようなやり方で、見る者、果報として経験する者、このように思う者、諸々の理解を伴って思慮する者、この

³⁸ 「分割して (vyatyasya)」は [Up.1964, p. 558] において、avayavān vibhajyetyarthaḥ と註記される。

ように認識する者である。諸々の理解に関連づけて、「実にこのようである」と決定を為す者という意味である。思考と認識とから生じた聖典の意味は、決定したものであると見られるだろう。故にこのように見る者は、雄弁な者となる。名称を始めとし、期待を終わりとするものを超えて語る気質を有する者であるという意味である。

もし人々が彼に言うならば、もし、このような雄弁な者である彼に、常にあらゆる言葉によって、名称を始めとし期待を終わりとするものを超えて現存している生気をそのように語り、そのように見る〔彼に〕、すなわち〔それらを〕超えて語る気質のある、つまり雄弁な彼に、実に「私は、ブラフマンを始めとし柱を終わりとする世界にとっての生気であり、アートマンである (brahmādistambaparyantasya hi jagataḥ prāṇa ātmāham)」と言う者に、もし「あなたは雄弁であるか」と言うならば、「確かに、私は雄弁である」と言うべきである。それを否定するべきではない。どうして彼は否定しようか。何故ならば、一切の支配者たる生気を、この者は「私は〔アートマン〕である」というように、アートマンとして理解しているからである。

略号と参考文献

(拙稿 [2018] に挙げたものは、本稿にて引用しているものを除き割愛する)

○ 一次資料

[ChU] *Chāndogya-Upaniṣad*

[ChU.Bh] *Chāndogya-Upaniṣad-bhāṣya*

[BĀU] *Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad* (Kāṇva-Recension)

[BĀU.Bh] *Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad-bhāṣya*

Taittirīya-Upaniṣad, Kauṣītaki-Upaniṣad, Prasna-Upaniṣad

- [ChU.1934] Āgāṣe Kāśīnāthaśāstrī, *Chāndogyopaniṣat* : *Ānandagirikṛtāṭhikāśaṃvalitaśāṅkarabhāṣyasametā* (Ānandāśrama Sanskrit Series vol. 14), Puṇyākhyapattane: Ānandāśramamudraṇālaye, 1934.
- [BĀU.1953] Āgāṣe Kāśīnāthaśāstrī, *Bṛhadāraṇyakopaniṣat* : *Ānandagirikṛtāṭhikāśaṃvalitaśāṅkarabhāṣyasametā* (Ānandāśrama Sanskrit Series vol. 15), Puṇyākhyapattane: Ānandāśramamudraṇālaye, 1953.
- [Up.1964] *Ten Principal Upaniṣads With Śāṅkarabhāṣya* (Works Of Śāṅkarācārya In Original Sanskrit Vol. 1), Motilal Banarsidass, Delhi, 2015(1st. 1964).

[ChU.Dī] *Chāndogya-Upaniṣad-dīpikā*

- Gautam V. Patel, *Śrī Sāyaṇācāryaviracitā Chāndogyopaniṣaddīpikā*, sadguru gaṅgeśvara international veda mission, Bombay, 1989.

[BS.Bh] *Brahmasūtra-bhāṣya*

- ed. J. L. Shastri, *Brahmasūtra-Śāṅkarabhāṣyam, with the commentaries : Bhāṣyaratnaprabhā of Govindānanda, Bhāmāṭī of Vācaspatiśiṣra, Nyāya-Nirṇaya of Ānandagiri*, Motilal Banarsidass,

Delhi, 1980.

○ 二次資料

- Arthur Anthony Macdonell and Arthur Berriedale Keith.
[1912a] *Vedic index of names and subjects vol.I*, Motilal Banarsidass, Delhi, 1967(1st. 1912).
[1912b] 同 *vol.II*.
- Ganganatha Jha
[1942] *The Chāndogyaopaniṣad (A treatise on Vedānta Philosophy translated into English with The Commentary of Śaṅkara)*, Oriental Book Agency, Poona.
- Gonda, J.
[1975] *Vedic literature : (Saṃhitās and Brāhmaṇas)*, Harrassowitz, Wiesbaden.
- Horsch, P.
[1966] *Die Vedische Gāthā-und Śloka-Literatur*, Bern.
- Margaret and James Stutley
[1977] *A Dictionary of Hinduism; Its Mythology, Folklore and Development 1500 B.C.- A.D. 1500*, Routledge & K. Paul, London.
- Patrick Olivelle
[1998] *The early Upanisads : annotated text and translation*, Oxford University Press, New York.
- Robert Ernest Hume
[1921] *The Thirteen Principal Upanishads : Translated from the Sanskrit*, Oxford University Press, England.
- Radhakrishnan, S.
[1996a] *Indian Philosophy vol. I*, Oxford University Press, Delhi.
[1996b] 同 *vol. 2*.
- Som Raj Gupta
[2001] *The Word Speaks to the Faustian Man vol. 4 Chāndogya Upaniṣad*, Motilal Banarsidass, Delhi.
[2008] 同 *vol. 5 Bṛhadāranyaka Upaniṣad (Part-1, 2)*.
- 井狩彌介
[1969] 「ādeśa について」『印度学仏教学研究』17(2), pp. 684-689.
- 今西順吉
[1979] 「『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』第七章の研究」『北海道大学文学部紀要』27(2)、北海道大学文学研究科、pp. 1-37.
- 岩本裕
[2013] 『【原典訳】ウパニシャッド』筑摩書房.
- 後藤敏文
[2008] 「古代インドの祭式概観：形成・構成・原理」『総合人間学叢書 第3巻』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp. 57-102.
- 中村元
[1990] 『ウパニシャッドの思想』春秋社、2015(1st. 1990).
- 橋本一道

[2018]「サナトクマーラによる「豊富」の教説—Chāndogya-Upaniṣad-Bhāṣya VII 和訳研究
(1) ChU.Bh.VII, 16~26」『龍谷大学佛教学研究室年報』22, 龍谷大学仏教学院生会,
2018, pp. 121-95.

・ 吉水清孝

[2015]『クマーリラによる「宗教としての仏教」批判—法源論の見地から—』龍谷大学現代インド研究センター.

〈キーワード〉

ウパニシャッド, Chāndogya-Upaniṣad, シャンカラ (Śaṅkara), サナトクマーラ (Sanatkumāra),
ナーラダ (Nārada), bhūyas

(博士後期課程)